日本語と中国語の「事態把握」について

― 授受表現の使用及び対訳を例に―

趙　華敏
北京大学

１．問題提起

中国人日本語学習者にとって日本語の授受表現を適切に使うことは非常に困難である。本稿は「事態把握」をキーワードに、授受表現の使用及び日中対訳を通じて、その原因を探ってみたい。次の例を見よう。

（１）日本自身が経験した公害および、それへの対応など、私たちの成功と失敗の経験を、中国の皆さんの参考にしていただきたいと思います。（福田）／关于日本所经历的公害及其对策等，我们愿意把成功的经验和失败的教训拿出来供中国国民参考。

（２） 今天，我有机会到贵国国会演讲，同众参两院议员见面，感到很高兴。（温）／本日は、貴国の国会において演説をさせていただき、衆参両院の議員の諸先生方とお会いする機会を得ましたことを大変うれしく思います。

日中の両首相の講演からとった例である。このような授受表現を使った表現は福田の講演の中に５回も出ているのに対して、温の講演の中に１回しか出なかった。それに、例（２）の「我有机会到贵国国会演讲」を直訳するなら、「国会で演説する機会があって」になり、日本語の習慣に従えば「演説をさせていただき」となったのである。

２．事態把握[1]の立場から

認知言語学の基本的な概念には事態把握(construal 解釈／捉え方)というのがある。

事態把握とは「発話のプロセスにおいて把握事態を分節し、意味あるものとして構築する創造的な営みを言う。」「言語表現の構造や体系は、究極的に『把握事態をどう解釈したか』によって決まるというのが概念主義の意味間である。発話された言語表現を読み取る意味での『解釈』（interpretation）と区別する。」[2]

つまり、同じ事柄でも、「把握事態をどう解釈したか」によって、ものの言い方が違

---

[1] “construal”の日本語訳には「事態把握」「解釈」「捉え方」があるが、ここでは池上の用語を使っている。（池上　2006：20）

[2] 辻（2002：20）による。

ってくるのである。

これまでの研究で分かるように、「事態把握」には「より客観的なもの」と「より主観的なもの」とがある。図示すれば、以下のようになる。

図１

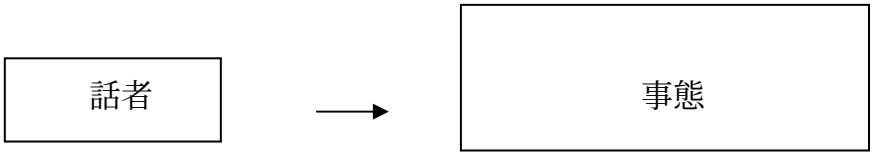

図２

図１では、話者が外から事態を捉える方法で、上で言う「より客観的なもの」であるのに対して、図２では、話者が事態と一つになって、その中で事態を捉える方法で、「より主観的なもの」である。多くの研究者が言うように、中国語は図１のような「より客観的」なほうで、日本語は図２のような「より主観的」なほうである。

このような「事態把握」の相違が言語使用にどんな影響をもたらしたのだろうか。

３．授受表現の使用及び対訳について

４．終わりに

結論から言うと、以下のようになる。

（１）日本語は終始一貫視点を変えないで、事態を捉えるのであって、テキストの成り行きから、授受表現が頻繁に使われるのである。中国語は時には日本語と同じように主観的な把握をするが、時には外から事態を捉えるのであって、テキスト内でも主語・主題の変化がよくあるので、授受表現を使う必要がなくなる場合が多い。

（２）授受表現を用いることによって受益性が含意されるという日本語の特徴も見逃せない原因の一つであろう。

キーワード：　授受表現　事態把握　対訳　視点　受益性

（参考文献省略）